

# 認知症 ポジティブ部 positive

## 「物とられた」に 怒らず叱らず

\* 認知症になっても「ポジティブ、(＝前向き、積極的)に生きるヒントや取り組みをお届けします。

### 「物をとられた」と感じてしまうケース



記憶をうまく活用できないと...



「忘れた」自覚は難しく...



「まずは、認知症の人の不安な気持ちに寄り添ってほしい」と話す矢吹さん

### 部屋ですつとさがし物

お便りをくれた女性に連絡し、詳しい状況を教えてもらいました。80代の父親が最近、部屋の中でずっと何かをさがしているそうです。例えば、現金やキャッシュカード。どうやら、なくさないように自分で引き出しなどにしまって、その場所を忘れていたのだ、とのこと。機嫌が悪いと、「お前が隠したんだろう」「困る姿を見て楽しんでいるのか?」と言われるそうです。「父には自宅で穏やかに、幸せに過ごしてほしいのですが……」と、女性はちょっと疲れている様子です。

「一緒に暮らす高齢の父が「物をとられた」と頻りに言うようになり、どうしたらいいかわからない」。そんな内容のお便りが届きました。家族に認知症の症状が目立ち始めた時、多くの人は戸惑います。「接し方」のポイントを専門家に聞きました。(阿部明霞)

## 思い込み 背景に不安

当事者や家族の支援に詳しい、高知県立大准教授で認知症介護研究・研修仙台センター特任研究員の矢吹知之さん(50)を訪ねました。矢吹さんは「実際には誰も物をとったり、隠したりしてないのに、認知症の症状で『盗まれた』と思います。まうことがあると言います。「記憶」の仕組みから説明してもらいました。



それでは、こうした場合に、家族はどのように対応すればいいのでしょうか。「物をとられた」という訴えに、家族は、「誰も盗んで

## 「本人の話聞いて」

情報を保管しておく③必要な時に呼び出す」という3段階で成り立っています。しかし、情報をしっかり保管できていなかったり、引き出せなくなったりすると、記憶をうまく活用できません。一般的に、認知症の「もの忘れ」では、新しいことを覚えるのが難しくなります。引き出せる記憶がなければ、少し前に目の前で起きた出来事

でも、その人にとっては「なかったこと」と同じです。お便りのように、いつもさがし物をしてるケースについて、矢吹さんは「物がそこにあった記憶はあるが、それを自分で『しまった』『消費した』『捨てた』ことなどは覚えていない、という状況が起きている」と説明します。「ここにあってはず」の財布や預金通帳、カギが突然、目の前から消えたら、誰でもあわてるはず。さがし続ける物は、「その人にとって」大切な物や愛着がある物であることも多いそうです。しかし、「忘れてる」と自覚することは難しいといえます。「自分にとって大切な物がなくなった」ことが度重なる、身近にいる家族を疑ったり、怒ったりという行動に結びつきやすいそうです。本人が自然に見つけられるようにしておく。「置き忘れていただけかな……」と感じられるかもしれない。ただ、どのような方法で不安を解消できるかは人それぞれで、必ずうまくいく対応はないそうです。その場をやり過ぎずため、「前からなかったよ」などとうそをついたり、適当にごまかしたりすることは、「信頼関係を崩してしまいかねないため、心情に配慮してそうせざるを得ない場合以外は避けたい」と矢吹さんはアドバイスします。何かをさがし続けたり、同じことを何度も聞いたりするのは、「自分で何とかしよう」と頑張っている証拠。困っていると、不安だというメッセージでもあります。「認知症の人の行動を変えようとするのではなく、周りの環境や対応を変えられるように、よく話を聞いてほしい」と訴えます。